

## 飯島賢二の『恐縮ですが...一言コラム』

### 第301回 政治の動きをナメ読み！ ～副島隆彦ストーリー

2009.3.8

マスコミを巻き込んで、与野党大合唱で麻生内閣を潰そうとしている。天邪鬼の小生ゆえ、この一連の動きを斜めから見ると、やっぱり何か変なのである。どうも、誰かが書いたシナリオ通りに動いている。うがった見方をすれば、あまりにも「なぜ？」が多すぎる。

一連の流れを時系列的に追ってみる。サブプライムローンで混乱極まるアメリカに、決定的打撃となったリーマンショックが2008年9月15日、アメリカ金融市場が破綻した日だ。この一撃で大統領選はほぼオバマに固まっていった。麻生太郎が首相指名を受けたのが9月24日。直後の26日の麻生内閣支持率は49.5%（読売新聞）だった。

そして、オバマが11月4日、大統領に当選確定となり、翌1月に正式に就任する。

2月5日の清和会（町村派）の権力闘争で、高山清司派が勝った、つまり、森善朗が、中川秀直に敗北したことを物語る。唯一、麻生を支えていた大黒柱が揺らいでしまった。

2月12日、突然小泉が「笑っちゃう」答弁で公然と麻生批判を始めた。2月14日、例の、G7の中川酩酊会見。2月16日ヒラリー・クリントン来日。翌々17日、小泉元首相がわざわざロシアから会見し、一度採決で賛成したにも拘らず、本会議に欠席表明。

何としても不可解である。

なぜなのか？大胆な仮説に基づき、ミステリーストーリーを辿ってみる。

基本的構図は、まず「アメリカ従属思考」の小泉、その理論武装の役割が竹中平蔵。アメリカの「アメ」に乗り遅れるなど追従する中川秀直と小池百合子。それに対し「我国独自の態勢を模索する」麻生・中川、森連合軍。そして、あいも変わらず、表の顔と裏のそれが全く違う名悪役・鳩山の登場と、唯我独尊の小沢一郎が助演し、オリックスの宮内や郵政の西川がエキストラとして出演する。もちろん主演はアメリカ・オバマ大統領である。さて、こんなドラマの展開である。

順調にスタートしたはずの麻生内閣。しかし、麻生と中川が、昨年10月13日前後から、「もうこれ以上、日本は、アメリカに金を出さない。国民の大切な資金を、出さない。米国債は買い増したくない」と、公然と言い出した。これが全ての発端である。

その後全マスコミは、一斉に麻生たたきが始まった。ホテルのバーで遅くまでお酒を飲んでいる首相、漢字が読めない首相と嘲笑した。軽口をたたく癖があるのは事実のようだ。意思がゆらいでブレているようにも見える。しかし、その後猛然として「不可思議」な言動が続くのは、前述した通りである。アメリカは、麻生政権潰しに、公然と動き出した。カネを貰がないからだ。

中川大臣の酩酊会見。これに関しては、未だに奇怪な噂が後を立たない。中川昭一はローマでのG7で、酒の中にクスリを盛られたというものだ。ロバート・ゼーリック世銀総裁との会談の席だったか、そのあとの、怪しい3人の女記者達との30分の食事の時に、薬を入れられたようである。中川自身が後で弁解していた「薬」がキーワードである。冷静に考えると、随行員が何十人といえるなかで、ありえない行為であること自体、「なぜ？」が付きまとう。中川大臣は、酒を毎晩浴びるように飲んで、失禁することも多い、と言われ続けた男だ。やっぱり、アメリカは、弱点を突いてくる。

ここまでくると、いよいよ、ミステリードラマ風になってきた。

ヒラリーの来日目的は明確である。日本に、60兆円分ぐらいの、米国債を買わせる腹である。それがヒラリーの現下の仕事（任務）だ。これで、累計、700兆円ぐらいになる。ヒラリーは、16日夜、来

日して、すぐ深夜に、中川秀直と小池百合子と、在った。米国債を買えば日本に、小池百合子政権を作らせようと「アメ」を約束した。

そして小沢一郎である。ヒラリーとの会見が実現すれば、米國務長官と日本の野党党首による個別会談は初めてとなる。9月までに行われる次期衆院選での政権交代が現実味を帯び始めており、オバマ米政権には有力な次期首相候補である小沢氏とのパイプを構築しておく狙いがありそうだ。民主党にとっても、政権交代を視野にオバマ政権の要人との接点をつくる絶好の外交舞台となるとみられる。しかし、小沢は、ヒラリーの意図を熟知していたから、会見をかたくなに断っていた。

小沢氏は最近、「日米同盟は大事だが、オレは米国を信用していない。米国はいろいろ負担を求めてくるだろうが、迎合してはだめだ」と周囲に語っている。

結果的に会見は実現した。そして、はっきりと、「同盟関係は、従属関係ではいけない。対等でなければならぬ」と、堂々と、ヒラリーに言った。

さて、小泉純一郎である。小泉は、麻生が、「郵政民営化には、自分は必ずしも賛成ではなかった」と、失言した翌日、「笑っちゃうしかない」と言って、政権打倒の火柱をあげた。そのあと、モスクワに立った。アメリカが、小泉を、特使に立てて、送ったとの、うがった憶測がある。

ロシアは、石油(原油)の値段が、一バーレル32ドルまで下げられて、食をなくした労働者たちが、モスクワでもデモをしている。このままでは、いくら、豪腕のブーチン、メドベージェフでも、金が無くなって困る。それで、アメリカが、「原油を、上げてやるから、その代わりに、米国債を、もう一度、買いなせ」と、ロシアに、日本を使って、交渉している、ということだ。ニューヨークの先物の石油市場である、NYMEX(ナイメックス)で、アメリカは、石油価格もあやつっている。どうにでも操作できる。

アメリカとしては、日本に、カネを出させて、北方領土をカネで買わせるかわりに、原油・天然ガスの世界値段の上昇を、取引材料にして、ロシアを、日本を使って、だまさせよう、という魂胆だ。世界政治は、このように、金融・経済そして資源、軍事(安全保障)の問題を巻き込んで、泥臭く、進むのだ。

更に「かんぼの宿」問題。あの鳩山邦夫が突如として「かんぼの宿」売却問題を吠え出した。実はここ1~2年で、郵政の施設はかんぼの宿以外ほぼ70%は売却済みである。しかも1万円で買って6,000万円で売った前例もあるにも拘らず、「なぜ」今なのか？オリックス不動産への売却契約の締結は今年の12月26日である。

これによりオリックスの企業イメージは地に落ちた。小泉・竹中陣営で朋友だった宮内は、個人的にも大きな痛手を受けた。麻生陣営から言えば「あっぱれ」といいたいところだが、海千山千の鳩山である。狙いはもともとオリックスではなく、西川郵政社長にあった。

西川義文は「最後のバンカー」といわれ、三井住友銀行の生え抜きのドン的存在だった。日本郵政株式会社の社長として、全国3千万人のおじいちゃん、おばあちゃんの郵貯を守ってきた、その西川の首を取る気だ。西川を追い落として、旧郵政(今は総務省)の官僚を、日本郵政の社長にして、中川・小池のアメリカ路線の勢力を強化して、それで、日本の郵貯のカネで、米国債や、潰れかかっているシティバンク(株価は3ドル)の株を、まず60兆円分、買わせようという計略である。

このドラマは新たな展開になってきた。小沢の「第七艦隊以外無用」発言、小沢代表公設第一秘書逮捕劇から、総選挙へと第2幕が始まっていく。いやはや、えらい話になってきた。

政治の世界は我々庶民では理解しがたい、ミステリアスな展開があるようだ。この政治ドラマは、実は小生が考えたシナリオではない。思想家、政治評論家で著名な「副島隆彦」氏の受け売りであること、明記したい。以下に副島氏の経歴を記す。

## 副島 隆彦

(そえじま たかひこ、1953年5月1日 - )は、福岡県福岡市生まれの評論家、常葉学園大学教育学部特任教授。日本国際政治学会、日本アメリカ学会所属。

明治期の政治家副島種臣の傍流の子孫。早稲田大学法学部卒業。吉本隆明・久野収・小室直樹・岡田英弘・片岡鉄哉を師と仰ぎ、政治思想・法制度論・経済分析・社会時事評論の分野で評論家として活動。

それ以外にもカール・マルクスやフランシス・フクヤマやアイン・ランドやマックス・ヴェーバーにも多大の影響を受け尊敬する。

日米の政財界・シンクタンクに独自の情報源を持つとのことで、「民間人・国家戦略家」として、「日本は国家として独自の国家戦略を持つべきだ」と主張している。

副島国家戦略研究所(SNSI)主宰。

出典：フリー百科事典『ウィキペディア(Wikipedia)』より

参考：「副島隆彦の学問道場」

<http://soejima.to/snsi.htm>